

第4回大崎地区における高校の在り方検討会議 会議録

日 時 平成31年1月25日（金）午前10時から正午まで
場 所 宮城県大崎合同庁舎501・502会議室
出席者 別紙「出席者名簿」のとおり

1 開 会

【司会】

それでは定刻となりましたので、「第4回大崎地区における高校の在り方検討会議」を始めさせていただきます。本日は大変お忙しいところ、御出席を賜りありがとうございます。会議に入ります前に、マイクの使用についてお願いがございます。御発言の際には、担当者がマイクをお渡しいたしますので、お知らせ願います。

初めに、開会に当たり宮城県教育庁教育次長 高橋剛彦から御挨拶を申し上げます。

2 挨拶

【高橋教育次長】

改めまして、おはようございます。委員の皆様には御多用のところ第4回大崎地区における高校の在り方検討会議に御出席をいただきまして感謝を申し上げます。この会議も今回で第4回目となりました。1回目、2回目、3回目それぞれ委員の皆様から忌憚のない御意見を賜りながら会を進めてきたわけでございますけれども、第3回では我々が考えているこの地区の新しい高校のイメージをお示しさせていただいたところでございます。今回は学校名も含めた具体案について、こちらの考えをお示しさせていただきます。委員の皆様からは忌憚のない御意見・御提言をいただければと思います。もちろん様々な思いや御意見がおありであることは、3回まで皆様の御意見を聴きながら、我々としても理解するところです。最初の会議でも申し上げましたけれども、魅力ある高校づくりをこの地域でどう進めていくかという思いは共通しているのではないかと考えております。今日も新しい資料を含め、今までの振り返りをしながら御提案をしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【司会】

続きまして、出席者については出席者名簿のとおりですが、鹿島台商業高等学校同窓会長の栗田利男様、宮城県高等学校PTA連合会大崎支部長の五十嵐亮様、大崎市PTA連合会長の中川博樹様、遠田郡PTA連合会長の関原英明様、宮城県北部教育事務所の小野

寺修所長は所用のため、本日は御欠席です。

ここからの会議の進行は当検討会議の開催要項に基づき、座長の高橋教育次長にお願いします。

3 報 告

検討会議におけるこれまでの検討内容について

【高橋教育次長】

それでは次第のとおり、進めてまいりたいと思います。まず、次第の3 報告「検討会議におけるこれまでの検討内容」について、事務局から説明をお願いします。

【事務局（西城教育企画室教育改革班長）】

それでは事務局より説明させていただきます。当検討会議につきましては、昨年9月12日の第1回目の会議以降、11月5日、12月26日とこれまでに3回の会議を開催してまいりました。本日は、まず、当会議におけるこれまでの検討の状況を確認するため、3回の会議を振り返りたいと思います。

資料1を御覧ください。資料1は、3回の会議で使用した資料を中心にまとめております。まず、9月の第1回目の会議では、大崎地区東部ブロックにおける高校の現状について確認いたしました。資料1ページの真ん中になりますが、項目2の「大崎地区（東部ブロック）における高校教育の状況」にまとめておりますけれども、(1)として生徒数の推移、ページをめくっていただきまして2ページ、(2)各高校の学科等ということで、表1から表3、それから3ページになりますが、各高校の状況や特徴的な取組について、第1回目の会議における各校長先生からの御発言内容を3ページの真ん中にまとめてあります。さらに第2回目の会議内容になりますが、県内の平成21年度以降の高校の再編状況につきまして、4ページの(4)に掲載しております。

次に項目3ですが、「第3回会議までの総括」といたしまして、これまで3回の会議の内容を総括した部分になっております。まず、第2回目の会議の議題である「望まれる学校像」に関しまして、再編に関する考え方ですとか再編に当たっての学びの在り方などについての御意見を大きく三つにまとめて記載しております。「各高校の置かれている状況等について共通理解を得た上で、今後も少子化が進行する中で部活動などの課外活動も含めた教育環境の充実のためには、再編はやむを得ない。」二つ目になりますが、「再編に当たっては、社会的状況や実現可能性等を考慮しつつ、地域の要請や学校の配置バランス、求められる学びなどについて整理する必要がある。」三つ目、「地区内の既存の専門学科の学びの継続性は重要である。」これら三つにまとめております。

これらの御意見を踏まえまして、以下、5ページから6ページにかけては、第3回目の会議内容である大崎地区東部ブロックにおける高校の将来像についての資料といただ

きました御意見を掲載しております。いただきました御意見につきましては、5ページ下にまとめておりますが、小規模校の存在意義や再編の必要性に関する御意見がありました。大きな方向性としては、東部ブロックにおける再編はやむを得ないとの意見であったこと、新たな職業教育拠点校設置の方向性につきましては、概ね合意が図られたということ、また、今後の検討に当たりましては、学ぶ側、生徒側の発想が求められることや再編に向けたスケジュールを念頭においた検討をしていくべきといった御意見をいただきました。これらを踏まえて本日第4回目の会議に至っているという状況です。資料1についての説明は以上になります。

続きまして、前回の会議において、御要望等のありました項目につきまして、説明させていただきます。まず、スケジュール感のお話がありました。こちらにつきましては特に資料は準備しておりませんので、口頭で説明させていただきますが、直近の事例で申し上げますと、現在、南部地区の柴田農林高校と大河原商業高校の再編をしているわけですが、開校は平成35年度を予定しております。スケジュールを申し上げますと、新設校の学科構成や設置場所等の基本的な事項の検討に2年、その後、校舎等の設計に2年、建築工事に3年ということで、検討開始から校舎完成まで合わせて7年間を要する計算になっております。南部の場合ですと、新設校の設置場所が現在の柴田農林高校の校地内となっておりますので、土地取得など要件によってはもっと時間がかかることが想定されることとなります。

次に、平成27年度に開校いたしました登米総合産業高校についての評価と課題についてのお話がありました。登米総合産業高校につきましては、27年度開校ということで、29年度に第1回目の卒業生を出したばかりです。教育活動の検証についてはこれからという状況ですので、本日は資料2になりますが、登米総合産業高校における特徴的な取組について御説明させていただきたいと思っております。

資料2を御覧ください。まず、項目1として学校の概要をまとめております。皆様十分御存知かと思っておりますが、3校と1学科を再編してできた高校でありまして、二つ目の〇になります。6学科ある総合産業高校になっております。教育活動の特徴の一つとして、三つ目になりますが、「起業プロジェクト」という学校設定科目、学校が独自に設定する科目ですが、これを設けまして、学科間連携により所属学科以外の複数の専門分野の学習を可能としております。また、四つ目、これまでの会議の中でも話が出ておりました「登米地域パートナーシップ会議」ですが、学校と地域が連携して、地域の課題解決に向けた教育活動を実践しております。

これらの取組について項目2になりますが、まず「起業プロジェクト」です。学年ごとに段階的に進めていくものですが、1年生では、学校設定科目である「産業基礎」というものを学科にかかわらずすべての生徒が学習する、具体的には、資料記載のとおりですけれども、(1) 所属する学科以外の基本的な専門科目の学習、(2) 地域の方々による様々な産業分野に関する講話の聴講、(3) 在籍学科と他の学科に関する事業所を組み合わせ

の地元企業見学などを実施しております。これらを通して、産業全般の基礎や職業人として必要な知識や態度を身に付けるということで取り組んでいるものです。次に2年生ですが、自分の所属する学科以外の専門科目を選択して選ぶ「総合選択システム」をとっておりまして、興味や関心の幅を広げていきます。また、2年生の後期と3年生では、異なる学科の生徒で班を編成しまして地域課題について研究する「起業実践」を学校設定科目として設置し、学科を超えて地域の課題や資源を生かす取組など、地域に関連するテーマの解決に向けたグループ研究を地域企業など関係者の協力を得て実施しているところです。資料2ページに表がありますので後ほど御覧いただければと思います。

次に、項目3の「登米地域パートナーシップ会議」になりますが、設置目的にありますとおり、産業界や行政・教育機関等との強いパートナーシップを構築し、地域に根ざした実践的な教育活動の展開を図るために協同して教育活動を行う組織です。三つ目の〇のとおり、学識経験者や登米地域の産業界の関係者、行政機関や教育機関の職員、登米総合産業高校職員等で構成されておりまして、四つ目の〇になりますが、専門部会として、学科間の専門性を高め登米地域が求める人材育成に関することを検討する「専門学科連携部会」と、学科間連携に関することを検討する「学科間連携部会」を設置しまして、様々な検討を行っているという状況です。

この地域パートナーシップ会議と登米総合産業高校の教育活動の関係性を示したものが資料3ページの図になります。こちらは登米総合産業高校からいただいた図になりますが、高校における教育活動と地域との連携の核として地域パートナーシップ会議を位置付けておりまして、地域とともに教育活動を展開している形が見て取れるかと思います。

資料2の最後のページには参考といたしまして登米総合産業高校の再編前と再編後の在籍者の状況を付けておりますので後ほど御覧ください。資料2の説明は以上です。

次に、資料3になりますけれども、全県一学区化について前回の会議でお話のありました地区間出入りの状況ということで、平成26年7月に県立高等学校将来構想審議会から答申をいただきました「全県一学区化」に関する検証結果からの抜粋を掲載しております。こちらにつきましては、入試の出願倍率や同一地区以外の公立高校への進学割合、地区別の通学状況などのデータ分析と現地調査等の検証結果として記載されているものになります。箱の中になります。第4章3(1)「生徒の地区間流出入の状況」では、その成果につきまして、「地区間の比較で見ると限りにおいては、現段階では、特定の地区・学校への志願の集中は見られませんが、全県一学区化前と比較して、県全体として同一地区の公立高校以外への進学割合や、公立高校における同一地区以外の中学校出身者の割合がともに高くなっていることから、一定程度、地区間の流動化が進んでおり、学校の選択幅が拡大したと言えます。」としているところです。それから下にあります第5章では、第2段落後段になりますが、「学校の選択幅が拡大するなど、当初の目的に沿った制度運営が図られていました。このことから、全県一学区化が実施されてから3年以上が経過しますが、概ね安定した教育活動が行われており、大きな弊害や課題は生じていないと言えます。」として

いるところです。資料をめぐっていただきまして、参考といたしまして地区間出入りに関し、ここ3年間の大崎地区と他地区間の中学校卒業者の高校進学に関する出入りについて掲載しております。教育企画室調べの数値になりますけれども、まず項目1は大崎地区の中学校卒業業者のうち全日制高校への進学者の進学先所在地を見たものになります。全日制高校進学者数は記載のとおりですが、3ヶ年度いずれも1,800人代となっています。このうち大崎地区内の高校への進学者は平成28年度は1,608人、平成29年度は1,561人、平成30年度は1,537人、それから大崎地区以外への高校への進学者につきましては、それぞれ270人、282人、276人となっております。次に項目2ですが、こちらは、大崎地区に所在する全日制高校への県内中学校からの入学者数を見たものになります。大崎地区に所在する全日制高校への県内中学校からの入学者数は、資料上から順に、1,920人、1,875人、1,852人となっております。このうち大崎地区の中学校からの入学者数は、項目1の大崎地区と同じ数値になります。一方、他地区から大崎地区の高校への入学者数は、312人、314人、315人となっております。

これらから大崎地区と他地区との出入りを見たものが項目3になります。項目1の大崎地区の中学校卒業業者のうち他地区の高校へ進学した生徒の数、表の網掛けの①の数値になります。こちらと、他地区から大崎地区の高校へ進学した生徒の数、表の網掛けの②の数値を比較しますと、他地区から大崎地区に入ってくる生徒の数の方がいずれの年度でもそれぞれ42人、32人、39人と多くなっており、転入超過、出て行く人数より入ってくる人数の方が多い状況となっております。

次第3の報告事項についての説明は以上になります。

【高橋教育次長】

第3回までの検討会議における検討内容についての説明と前回会議で御質問のありました件について改めて資料を整理して説明申し上げたところでございます。これまでのところの説明について委員の方から御質問や御確認の点がございましたら挙手していただければと思います。はい、奥山委員。

【松山高等学校教育後援会 奥山会長】

最後に御説明があった件に関してですが、前回の私の質問に丁寧に資料まで用意していただいて、お答えいただいたことに関して感謝申し上げます。ただ、大崎地区に入ってくる生徒の方が多いということが、意外だったという感じはあるのですけれども、今これを見た時に分からないことがあったものですから、一つは、どういう生徒が出ていって、どういう生徒が入ってきているのだろうと。ここが見えないのですよ。最初から大崎の生徒は大崎で育てたい、教育したいと、そういう思いがあるということは各学校の先生方からお話がありましたけれども、こういう生徒を教育したいと思っている生徒たちが皆出て行ってしまっているのではないかと。私の質問の趣旨というのがその辺にあったので、数値

だけで示されてもそのところが見えないということが実感であります。数が多く入ってきてくれているということは嬉しいことではありますけれども、どんな生徒が入ってきているのか、どういう学校に入ってきているのか、本当に地区間の流動化が進んで、学校の選択幅が拡大したということで、当初の目的に沿った制度運営が図られているというのは、こういうことだったのかなと、今この資料を読んでいるところです。そういう意味で大変丁寧に御回答いただいたのですけれども、私としては腑に落ちないところがあるということを申し置きたいと思います。

【高橋教育次長】

今の御発言は御質問ではなく御感想ということでよろしいでしょうか。他に委員の方々に御質問等ございましたら。よろしいでしょうか。

それでは、資料4について説明をお願いいたします。

4 議事

大崎地区（東部ブロック）における高校の将来像について

【事務局（西城教育企画室教育改革班長）】

それでは議事2の大崎地区東部ブロックにおける高校の将来像について、資料4を御覧ください。資料1においてこれまでの会議の内容についてまとめておりましたが、この内容を踏まえて、大崎地区東部ブロックにおける高校の将来像を示しております。第3回の会議においては、少子化の中、将来を見通して生徒にとってよりよい教育環境を作っていくため、「東部ブロックに所在する学校全体で学びの選択肢を確保し、職業人材を育成する。」というコンセプトの下、その具現化のための手法として既存校の学科改編と再編統合による職業教育拠点校の設置を提示していたところです。資料4のコンセプトにつきましては、第3回目の会議で示したとおり、東部ブロックに所在する学校全体で学びの選択幅を確保し職業人材を育成するとしていますが、これからの大崎地区東部ブロックにおける教育の方向性について、四つまとめております。まず一つ目といたしまして、「生徒の多様な興味・関心や進路希望に対応する学びの場の提供」、それから時計まわりに二つ目、「地域でこれまで培ってきた学びの継続」、それから三つ目といたしまして、「社会的・職業的自立に必要な能力を持った生徒の育成」、四つ目といたしまして、「社会の変化や生徒の実態に対応した新たな学びの創出」ということを掲げております。

これらの方向性を実現するため、ページの下の方になりますけれども、まず一つ目といたしましては、職業教育の拠点校ということで、松山高校、鹿島台商業高校、南郷高校の3校を再編いたしまして、新たな魅力ある職業教育の拠点校を設置することを掲げております。一番下の方向性の欄になりますけれども、学びの継続の趣旨から、これら3校に設置されております専門学科と「学びの取組」を引き継いでいくこと、また、社会の変化や

生徒の実態に対応した新たな学びの創出の観点から、社会的ニーズに基づくとともに、他の学科とも有機的に繋がるような新しい学科の設置を検討していくこととしております。それから涌谷高校につきましては、基本的な方向性としては、現状の普通科を維持しながら、併せて地域のニーズ等を考慮し、福祉に関する学びについて検討していくこととしているところです。また、小牛田農林高校につきましては、基本的には現状の農業技術科及び総合学科を維持することとしているところです。新設校につきましては、これまでの大崎地区における専門教育を踏まえつつ、社会的・職業的自立に必要な能力を持った生徒の育成を通して、地域と連携しながら地域の産業に貢献できる高校にしたいと考えているところです。また、東部ブロック全体において、既存の高校と合わせて、生徒の多様な興味・関心や進路希望に応えられる魅力ある教育環境を提供していきたいと考えているところです。資料4の説明は以上となります。

【高橋教育次長】

今回初めて具体的な学校名を出して今後の再編の方向性、我々が目指す新しい魅力ある職業教育拠点校というものの一端といいますか、考え方をお示しさせていただいたところでございます。もちろん涌谷高校も小牛田農林高校もそれぞれ書いてあるような取組を充実させていくことによって、魅力ある学校づくりを更に進めていくということでございます。第1回目の会議でも申し上げましたけれども、生徒が減っていく中で子供たちから支持される、入りたいという学校がどういうものかということも含め、様々な御議論をいただいて、今日具体的に学校名をお示したところでございます。

資料4について、また資料1から3や口頭で説明いたしました内容でも結構でございますので、委員の皆様からの御意見等をお伺いしたいと思います。佐々木委員、どうぞ。

【南郷高等学校同窓会 佐々木会長】

資料を持って参りましたので、御覧いただきながらお話をさせていただきたいと思えます。今、4回目にして松山高校、鹿島台商業高校、南郷高校の三つの高校を職業教育拠点校にするという案が示されました。それについて意見を申し上げますので、お考えいただければありがたいと思えます。三つの提案をいたします。一番目と二番目は矛盾いたしますのでそこは矛盾を承知でお聞きいただきたいと思います。三番目は新たな提案でございます。

松山高校、鹿島台商業高校、南郷高校、これは職業高校として私は最初の回からずっと、職業高校を大崎地区から無くさないでほしいということを提案してきました。それに沿っていただいたのがこの案だと思ひ、ありがたく思っております。

私は教頭時代に松山高校にいました。松山高校のファッションショーが完成した時の喜び、それも見せていただきましたし、私は元々商業科の教員でありますので、鹿島台商業高校の中身はよく存じ上げております。母校は南郷農業高校の農業科であります。この

3校を知り尽くしていることを自負しております。そこで申し上げるのですが、先ほどの御説明では柴田農林高校と大河原商業高校、既存校を使っでの学校開設まで約7年間を要するという話がありました。まず三番目のところに書いたのですが、新たな学校を作る時には、土地の取得、校舎の建築等、何十億というお金が必要となり、その期間も必要となります。これはすべて県民の税金で賄っていくこととなりますので、あえて新たな施設を設けることではなくて既存の学校の施設を使っではどうだろうかということです。

まず、確認するような形で申し訳ないのですが、南郷高校の校地であります。先ほど配っていただきました資料にありますとおり、全体で112,000㎡の土地を持っています。山の無い、坂の無い平地にあるところで、かつては1学年6学級あった学校でございます。極端な話、ここに涌谷高校の4学級を持ってきて、8学級以上の規模にも耐えうるくらいの敷地を持っている学校であると御理解いただければと思います。かつて南郷高校には家庭科があつて、現在も被服室、調理室が残ってございますし、教育振興会の支援で最新の情報処理室が2教室整備されています。鹿島台商業、松山高校を受け入れても、十分な施設が残ってございます。それから、かつて食品化学科がございましたので、それらの施設も残ってございます。学校緑化コンクールで日本一に輝いた学校であり、今から50年先、100年先でも耐えられる大変豊かな学習環境が整った学校でありますので、多様な校地利用にも耐えられる。おそらく今後50年、100年経った後にこのような選択をした人たちが評価される時代が来るだろうと思います。教育は百年の大計だと言います。100年先を見越した目でお考えをいただきたいと思います。

それからアクセス性であります。現在、東北本線鹿島台駅からの交通手段は、2年程前から美里町の協力で町民バスの利用が可能となっております。朝夕通学生徒が利用しており、既に足の確保ができておりますし、鹿島台に新しく設けられた新東口を利用しますと、もっと時間が短縮されますし、屋根付きの駐輪場も整備された状況でございます。

もし新たな学校を作った場合、以前、他の委員からお話がありましたとおり、今、南郷地区から小牛田地区に中学校が統合されようとしております。それならば南郷地区に新設校を設ければよいのではないかと、南郷中学校と南郷高校が消えてしまつては地域から子供たちの姿が無くなります。本当にこれが町村合併の目指したものだのだろうか、南郷地区が沈んでしまわないだろうかという心配が個人的にございます。南郷高校は皆様既に御存知のとおり、野田真一翁が私財を投じて創立し、2年後には90周年を迎えるという学校です。かつて環境緑化日本一、銃剣道全国制覇など90年の歴史と1万人を越える卒業生を有する学校です。新たな学校を設置することにより消えてしまうことは惜しいという思いがしております。

二つ目ですが、これは相矛盾する考え方でございます。新しい酒は新しい革袋に入れろという言葉があります。統合ということになったならば、既存の学校にこだわらず新たなしがらみのない場所に三つの学校を作つたらどうかと。鹿島台駅裏から半径1km以内のところに、鎌田記念館、野球場などの施設があります。これらの施設と統合した学校でスタ

ートしてくれば三つの学校のバランスも取れるのではないかということ、相反する意見ですが考えております。

それから資料4の最後のページに示されている、「既存校に設置されている専門学科及び学びの取組を踏襲」というところですが、是非、南郷高校としては、産業技術科を残していただきたい。それから二つ目に「併せて社会的ニーズに基づいた新たな学科の設置を検討」とありますが、地域のニーズとこれからの状況を考えた時に、新たな学校の特色を出すために、例えば「醸造科」を新たに設置してはどうかと考えています。その考え方を示しますと、松島高校には観光科が、多賀城高校には災害科学科が設置され、それぞれ成果を上げていることが見られるところです。この大崎地区では農業が主産業であって、米粉、酒米、大豆を利用して加工した商品開発に秀でた地域でありまして、地域には酒造メーカーの一ノ蔵、黄金澤があって、仙台味噌、醤油工場があって、このような醸造地域です。これらの醸造企業と連携した学校を作ったならば、家庭科の授業では食品加工や開発、産業技術科では米、大豆の加工・利用、商業科では起業プロジェクトというような三つの学科がそれぞれ活かされるのではないかと、県内にはない特色のある学校ができあがるのではないかと考えております。かつて南郷高校には食品化学科が設置されて施設設備等がまだ残っております。これらの施設を利用すれば安く済むと考えております。

是非、三つの提案でございます。一つは既存校を利用して日をかけないで短期間で新たな学校を設けるということ、二つ目は相反することですが、三つの学校のしがらみにとらわれない鹿島台駅から1km範囲内に校地を取得して学校建設を図る、三つ目は地域のニーズに則した醸造科なるものを作って特色ある学校を考えていただければと。これからの時代に対応する学校として、魅力ある学校ができるのではないかという私案であります。以上の三つの提案をいたします。

【高橋教育次長】

佐々木委員から、資料を作っていただいて御説明いただきました。ありがとうございます。具体的な御提案がございました。新しい取組も含めて新しい学校に対する思いもお話しいただきました。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

事務局からこの資料を拝見させていただいての受け止めについてお話をさせていただきます。それぞれの学校を知り尽くして、かつ熱い思いが込められた御提案であるとお見受けいたしました。今後、検討を深めていく際には、今お話のあった内容なども受け止め、参考にさせていただきたいと思っております。学校の設置場所について、相反する趣旨ということでのお話でありましたけれども、これはまさに我々が前回の会議などでもお示ししたとおり、仮に新たな職業教育拠点校を新設する場合には、既存の校舎を活用することはもちろん選択肢であるけれども、それにこだわっていると学びの幅を広められないという可能

性もあるので、検討する上ではそれにとらわれない設置の仕方、すなわち建物の新設も視野に入れた中身について検討していきたいということで、考え方としては同じところにあるのだと聴かせていただいたところです。

それから提案の三つ目にありました醸造科の設置ということについては、書かれている内容というのは地域の産業、あるいは地域の資源についての的確に指摘されている内容だと思います。それぞれの高校の学び、あるいはこれまでの取組などを含めたDNAを踏襲していくとなれば、こういった切り口というものも一つ、古くてかつ新しいというような内容になるかと思います。醸造というお話でしたけれども、幅を広げれば食と言いますか、食品と言いますか、そういう観点でもいろいろと見ていけるような御意見だと思いましたので、今後もこの議論を深めていく上では、貴重な御意見であると受け止めさせていただきたいと思います。

【高橋教育次長】

今、事務局から申しあげました考え方であると思いますが、矛盾というお話をいただきましたけれども、選択の幅はまだこうだと決めているわけではなくて、今、御提案のありました具体的な場所ですとか、まだ選択の余地はあると思います。その辺も含めて、まずは一緒にするという合意があって、その後何処ということで、新しい学校を設置する、改修することも選択肢ですけれども、限定して考えているわけではありませんので、その辺は幅広に検討したいと、そのように考えているということでもあります。

他に委員の方から御意見・御質問等ございますでしょうか。

【涌谷高等学校 樋野校長】

涌谷高校です。質問ですけれども、この方向性で示されました三つの高校について、クラス規模はどのくらいと考えているのか教えていただきたいと思います。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

このことについては今後の検討の中で話を詰めていくことになるかと思いますが、三つの学校の1学年の学級数を足し上げますと7学級ということになります。それより多くなるということではなくて、4学級とか5学級という規模になるのではないかと思います。決めていることではないので、これからの検討ということにさせていただきたいと思いません。

【高橋教育次長】

よろしいでしょうか。それでは他に委員の方で御意見や御質問があればいかがでしょうか。三浦委員。

【鹿島台商業高等学校 三浦校長】

鹿島台商業高校の三浦でございます。先程来から御提案いただいている資料等を見て、私の考えたことをお話させていただきたいと思います。定員の充足の状況とか中学校卒業生数の減少とかそういった状況を踏まえますと、やはり今回出していただいた3校の統合というところではやむを得ないだろうという考えを持っています。統合の今後の方向性なのですが、先ほどの佐々木先生からのお話もありますが、私は商業高校の校長としての立場上、商業教育の拠点的な学校という位置付けをお願いしたいと思っております。これまでの商業教育の流れとして、商業科の高校が統合されてきている状況がある中でありますので、是非、県立高校の中での商業教育の拠点校という位置付けを残していただければというのが一つ目の要望です。

それから二つ目ですが、これも話しさせていただいていた中部地区からの中学生の受入れについてです。中部地区から入学している生徒の中には、中部地区の高校に入学できないという理由で本校に入学している生徒もいるという状況があると思っております。そういった子供たちもしっかりと受け止めながら、地域に貢献できる学校づくりを考えておりますので、中部地区からの生徒の受入れも考えた対応、それから地域との連携、それがしっかりと出来る学校づくりということでその三つを是非、今後の拠点校づくりの中でお願いできればと思っております。それから既存の施設にこだわらないとのことでもあります。私も是非、他地区からの生徒も受け入れるということも踏まえ、大崎地区の広範囲の子供たちのことを考えれば、交通の便の良いというところで、先ほど佐々木先生からもありました鹿島台駅の東側、あの辺がよいかと考えております。これまでの会議の中で話しされてきた分については理解し、更により学校づくりということで検討をお願いしたいと思っております。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

ありがとうございます。まず鹿島台商業高校の学びということについての継続や位置付けについてが一点目だったと思います。細かな流れにつきましては、今後県教育委員会として検討をするということになってくると思いますが、この地区の商業の学びについていかに位置付けるかということは大事な視点になってくると思いますので、十分に御意見を踏まえた検討をさせていただきたいと思います。あわせて地域との連携ということで、冒頭、登米総合産業高校の事例などについて話しさせていただきましたが、まさに地域を学びのフィールドとしながら地域の関係するところと繋がっていくということを実践している事例でした。それも含めて今後の検討の中でどのような地域連携が図られていくか、これはもしかしたら広く皆様から御意見をいただきながら、展開していくということもあると思いますので、そういった観点も、この学校運営の中で何らかの形でできるような検討をさせていただければと思います。また、場所について、あるいは中部地区からの受入れという観点も含めての御意見でしたが、こちらについても先ほど申し上げましたとおり

どこに設置するかということで、通学の利便性であったり、生徒から選ばれる学校の一つの魅力ということにも繋がると思いますので、柔軟にかつ幅広くに検討を進めさせていただければと考えているところです。

【高橋教育次長】

それでは、他の委員の方、徳能委員どうぞ。

【松山高等学校 徳能校長】

前回、小規模校のことを考えてくださいというお話をさせていただいて、議論を蒸し返すような、繰り返すような発言だったと自分でももちろんそこは分かっておりましたが、ただ、地域のニーズですね、佐々木先生もおっしゃっていましたが、地域にとっての高校がいかに関与する存在であるかと考えた時に、何とか残る方向で考えていただくのが地方創生というか、もっと大きな、高校どうこうという問題ではなくて全体で考えた時に重要なことではないかということで発言をさせていただいたところです。そうとは言っても議論はこのように先に進んでおりますし、生徒が減少していくなどいろいろな状況を考えれば学校の再編は致し方ないことだろうということも分かっております。

登米地域の再編は登米高校の商業科を新しい登米総合産業高校に持ってきたことで、きれいに棲み分けされているものと思いました。これは学校を運営する側からすると大変経営しやすく生徒も選択しやすいという、大変分かりやすい再編だったと思います。また、登米総合産業高校のクラス数、規模を見ますと、6クラスということでこれもまた県で言っている4～8学級という規模のちょうど真ん中、少なくともなく多くもなく、地域の生徒数も勘案しながら登米高校の1クラスを持ってきた上で、新しい学校は6クラス体制ということで、新しく作るという意気込みが私には感じられました。一方、今回示された大崎地区での再編ではクラス数についてはこれからということですが、先ほど想定の中で4、5学級規模という数字が出ましたが、これも前回と同じで私自身矛盾がいっぱいで分からないところもあるのですが、小牛田農林高校が5クラス、それから涌谷高校が4クラス、それから新しくできる高校が4、5クラスということだと、細切れの三つの学校を作ってしまうことになるのではないかと懸念されます。せっかく5校が集まって東部地区を再編しようという考えがあるのならば、思い切って2つにするとか、せっかく再編するに当たってはそれくらいの、せっかく5校が顔を合わせて東部地区と言っているのであれば、それくらいの大きな再編であっても、将来のことを考えると、そういうこともあるのではないかとというのが一つ目です。

それから二つ目としては、東部地区の分かりやすさと申し上げましたが、現在、小牛田農林高校の中にも農業系列の学科があつて総合学科があり、それから涌谷高校に福祉、これは学科にするのかは分かりませんが、そういう学びを涌谷高校で実施するのであれば、職業教育拠点校という時に、分かりにくい、焦点がぼやけてしまうということがあ

ります。もう少し分かりやすい再編を、東部地区が再編して良かった、生徒たちが選択をする時に迷わず自信を持って選択できるというような分かりやすい再編のほうが地域にとってはありがたいし、地域も納得するのではないかと思います。それが二つ目です。

三つ目は、松山高校家政科を考えた時に、家政科は職業に結びつく学科ではないと、家政科をそのまま踏襲するということが果たしてよいのかということは、考えていかななくてはならないと思っております。せっかく3つが一緒になるのであれば家政科を繋ぎ役とした1つの大きな学校としての取組をしていく、その時にももちろん醸造科というものもあるかと思いますが、それよりもふさわしいものは調理科ではないかと考えております。調理ならば醸造のほうも含めて幅広く勉強ができますし、それから農業科から食材を得て調理科があって、それを商業科の商品に結びつけていくという一連の流れを考えるのであれば、調理科の方がよいのではないかと考えていました。ただ、家政科は家政科としてこれまでやってきたことがありますので、これからの議論ということになるかと思いますが、是非、せっかくお金をかけるのであれば、ケチらずに、新しい学校、新しい設備をきちんと入れていただいて、地域の皆さんに学校が再編されて良かったと言ってもらえるように、これから選択する生徒がわくわくするような学校づくりを前向きにさせていただければと思います。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

ありがとうございます。今、お話のあった件については、この後、県教育委員会ですっかりと検討していくに当たっての視点として聴かせていただきましたけれども、特に学科の繋ぎ役というところが貴重な御意見だったと思っております。と言いますのは、それぞれ学科の学びを継続しつつ専門系の学科を設置するとなった場合に、せっかく作るのですからそれぞれの学科が個別にそれぞれのことをやるということだけでは、やはりこれからの学校の魅力とは言えないと思いますし、一方では生徒のニーズと言いますか実態と言いますか、そういったものに応えるだけの狭いものになってしまうのではないかと。その観点で言えば、お話のあったポイントというものは、まさに今後議論をしっかりとしていくべきなのだと聴かせていただいたところです。具体的にどのような学科にするかということについては検討に時間を要すると思いますが、そこに込める思いというものについては大事にさせていただきたいと思っております。

【高橋教育次長】

他の委員からありますでしょうか。奥山委員どうぞ。

【松山高等学校教育後援会 奥山会長】

まず質問なのですけれども、松山、鹿島台商業、南郷の三つの統合で4クラスから5クラスの学校ということでしたが、この矢印の中で普通科についてはどのようになるのでし

ようか。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

今のところ普通科も入れた形では考えていないのですけれども、そういう意味で言うと家政、商業、産業技術、それらの学びを中心に据えるイメージで新設校について描いていたところですよ。

【松山高等学校教育後援会 奥山会長】

それから家政科と商業科と産業技術科をまとめて職業教育拠点校となっていますが、結局この三つの学科を出た子供たちはこのまま社会に出て即戦力として力を発揮していくことを方向性として持っているということなのではないでしょうか。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

もちろんそういうニーズもあろうかと思えますし、ビジネスマナーも含めて社会人としてのスキルを身につけるといことも大事かと思っております。そのところは議論の進め方によろ思えますけれども、今回、将来構想を作るに当たっていろいろな企業にお伺いしたところ、自分の会社に必要な人材は、やはり入ってからの教育に力点を置かれているというようなお話を伺ってきているところですので、そういった意味では、まず入口として最低限魅力的な人材として映る、そういった人材を学校の中で育てるといったことも一つの大事な観点かと思っておりますので、その部分につきましても学科の構成と関連するとは思いますが、検討の材料になるのではないかと考えております。

【松山高等学校教育後援会 奥山会長】

それからもう一つ、魅力ある職業教育拠点校というこの取り上げ方ですけども、少し違うのではないかと思われるのですよ。登米総合産業高校の例を出していますが、ここは網羅していますよね、農業、機械、電気、商業、情報技術、福祉というように。こちらを見ると新しい学科の設置を検討するとなっていますが、家政、商業、農業から派生した形の産業技術、その延長でしか考えられない気がするのですね。全く新しい工業的なものを持つてくるとか、あるいは福祉とか。福祉は涌谷高校でとなっているのですが、持ってこれないとなるとですね、職業教育の拠点というのは違っているのではないのでしょうか。工業や農業まであつて全部あれば拠点だろうけれども、いかにも中途半端な感じがするのですが、拠点校というネーミングはやめたほうがよいのではないかと思っています。

それから内容についても前3回の会議で聴いていて、きっと新しい学校には今までにないドラスティックな改革をした内容を示されるのだと思つたら全部踏襲、それから涌谷高校と小牛田農林高校に関しては維持ですよ。どこが新しくなつているのかという感じがするのですね。たつた一つ、社会的ニーズに基づいた新たな学科設置一つをもって、結局こ

こでの検討を収めてしまうのではないかという、そういう心配をしております。その辺のところどのように考えているのかお聞かせいただきたい。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

まさにこれからの検討に当たって重要な視点であると受け止めさせていただきました。確かに総合的にいろいろな産業を網羅した形で教育を展開するとなれば、では工業はどうするかという話もあるわけですし、まさに代表格として今お話があったところですが、大崎東部というわけではないのですが、中心部に古川工業高校があって、そちらで工業の学びは一定程度展開できるということを考えれば、役割分担というか機能分担ということも考えてよいのではと思っていますところ。したがってそれぞれの分野をすべてここで展開するというところまで持っていくのは難しいというのが今のところの考え方です。

新たな学科という部分に関しましては、先ほど佐々木委員からも御提案がありましたいろいろな視点、目線というものがあると思いますので、そこは既存の学科、3校の学びを踏襲する中でそれを繋いでいくとかそこから派生するものといったようなところも考えていく必要があると思いますので、先ほど佐々木委員からお話があったような、そういう観点での御意見などもいろいろ伺わせていただいた上で検討させていただきたいと思っています。

【松山高等学校教育後援会 奥山会長】

大崎東部というのはここに集まっている者は分かりますけれども、中学生が学校を選ぶ時にこっちは大崎東部、こっちは中部、西部だのそういう分け方はしないわけですよ。そうすると東部における拠点校と言ってもですね、拠点といたらセンターですよ、センターがあればライトもあるしレフトもあるのですからね、その中の中心だよということでしょう。そうすると、工業や農業というのは拠点校とどのような関係になるのかという感じになってしまうのですよ。ですから先ほど言ったように拠点校という言い方はやめましょう。家政科については先ほど徳能校長からお話があったことが示されておりますし、それから、産業技術科に関しても佐々木先生からもお話があったとおりの新しい学科というのは少し考えただけでもいくらでも出てくるのですよ、商業についてもそうだと思います。AIがどんどん進んでいる中で簿記とかそろばんとかそういうものだけやっていく訳にはいかないのですよ。5年後10年後、話は100年経つても、そこまで見通すのであれば、踏襲というものではなくて、全面的に家政、商業、農業ですね、そういうものを基にして、新しい内容の教育をやると、そういう形で持ってこなければ、学校が無くなる地域の方々は黙っていないですよ。何のために2つの学校はそのまま維持で、3つの学校を今までどおりの内容の学科を設けてやるのか、そう思います。そう思われます。ですから方向性については再検討をお願いいたします。

【高橋教育次長】

今の奥山委員のお話ですね、我々がいきなり今日お示ししたわけではなくて、3回目までの議論をベースに今回のお話、具体的な考えをお示しました。その中で各学校の今までの考え方を踏襲してほしいという御意見はかなり出たと思います。ここに来て全く違う学校でということは我々も少し戸惑う突然のお話だと思います。先ほどの三浦校長や佐々木委員からは、今までの培ってきた学校の伝統なり歴史なりをどう次の学校に伝えていくかということについて、それが全くゼロというお話ではなかったかと思います。ただ奥山委員のようなお考えもあるかと思いますが、ここで我々が考えている新しい学校は、大崎東部の、職業をはっきりと目指した形の教育、それをこれからの学科の在り方についても皆様に聴きながら新しい職業拠点校をお示したいという御提案を申し上げているわけですので、それを全く違うゼロにというお話は、意見としてはお伺いいたしますが、今まで3回の議論からは違うのかと思いました。

また、それ以外の小牛田農林高校なり涌谷高校でも、それぞれ維持といっても時代に合わせた学科の見直しや教育内容の検討は絶えずこれからも必要になってくるという意識を我々も持っておりますし、学校の方でも持っていると思います。そのことについて、小牛田農林高校、涌谷高校の各校長からお話いただきたいと思います。

【小牛田農林高等学校 樽野校長】

今お話がありましたけれども、本校については今回の御提案では現状を維持とありますが、現在、農業技術科の中に2コースとその他に総合学科とあり、それをずっと維持していくという訳ではなくて、次長からお話があったように、その時代のニーズに応じていかななくてはならないと思っておりますので、御提案、これはこれとして、そして学校は学校として生徒や地域のニーズを考えながら学校を見ていこうと考えております。

【涌谷高等学校 樋野校長】

涌谷高校といたしましては、ここに記載される前からカリキュラムの検討をしております。今度の入学生から3年次の選択において看護・医療・福祉コースを設けることとしております。なぜそのようにしたのかと言うと、本校の生徒の3分の1は進学、3分の1が専門学校、そして3分の1が就職という中で、看護・福祉系の学校に進む生徒が結構おります。そういったことから涌谷町が福祉の町ということで、そこ連携してできるものは何かと考えた時に、より専門性のあるコースを設けることで学校の魅力を出していこうということで今度の入学生からカリキュラムを変えたわけですが、更にそこに付加価値を付けていくような形で、今後考えていかななくてはならないだろうと思っております。

それと先ほどいろいろな先生方から御意見があったと思うのですが、私も新しく出来る学校を考えた時に、今までの科でよいのかどうかということについて探ってみました。文部科学省の「特色ある学科・コースを設置する高等学校」というものがあります。

それを見ると、全国にはいろいろな特色ある学科やコースがあります。私も考えた時には今までの家政科、商業科、産業技術科をベースにこれからの時代、先ほど委員からもあったように、AIの技術がどんどん発展していく、それから産業技術が変わって今まであった職種の半分が消えて新しい職種になっていく、そういうことを考えた時、新しい高校を作った際に、中学生が是非この学校に行ってこれを学びたいとなるような学科でないと駄目なのではないかと思っております。ということで既存の科にこだわらず今後の未来も考えた科なりコースを検討していただければと思っております。

【高橋教育次長】

それぞれ委員からお話がありましたけれども、他に何か委員からありますでしょうか。奥山委員、どうぞ。

【松山高等学校教育後援会 奥山会長】

話が進んでしまったところでもう一度お話をするのですが、次長さん何か勘違いしているのではないかと思うのですけれども、先ほど私が言ったのは家政科、商業科、産業技術科をやめてしまえばと言っているのではないのですよ。これはこれでやりたいと言っているわけですから。これをどのように新しい時代に、あるいは時代を先取りする形で教育の場に活かしていけるかということで、そういう学科を考えてほしいと言っただけで、根底からすべて覆して全く新しい今までとは関係のないような、学科を持ってこいという訳ではないです。その例として醸造科や調理科など一つの例として出ているわけですから、産業技術科と家政科と全く関係ない、踏襲していないというものではないわけです。ですからそのような発想で今あるものにこだわるのではなくて、踏襲というものは別にそのまま同じ事をやるのが踏襲ではないと思います。基本的な路線ですね。ここで言っているのは学びの取組ですよ。これは各学校が持っているそれを活かして、それでは新しい教育内容をどうやって作っていくかということだと思っております。踏襲だから全く同じことをしなくてはならないということではないと思っております。ですから学科を考える時にはもっともっと革新的な考え方をしてほしいと申し上げたわけです。そここのところを確認していただけますか。

【高橋教育次長】

今の奥山委員のお話であればその通りだと思います。私の方でそう思わなかったものですから、全くゼロベースというようにお話のようにとったものですから、先ほどのような話でした。当然、今それぞれの学校で様々な改革をして、取組を考え指導方法を見直しながら進めているわけがございますけれども、新しい科を学校の中に作るというのであれば、更にもう一歩進んだ新しい考えを取り入れていくことが必要であるということ、その通りだと思いますし、佐々木委員から出た学科の案についても新しい視点と思っております。

今後の生徒数の減少を考えますと、奥山委員のおっしゃるとおり、魅力がなければ選ばれないと。今までの旧態依然の学科をそのまま入れるということではなかなか難しいと、そういう認識は同じです。それがどのような学科ということは難しいと思うのですが、そういう考え方を踏まえた新しい学校というものを示していきたいと考えております。

【松山高等学校教育後援会 奥山会長】

もう一つ、これはお願いなのですが、醸造科について、これは松山高校でもかつて考えているのですね。考えた時に門前払いを食っているのです。結局お酒に関係することですから20歳にならない者には駄目だということで。ただ、何とかなると思うのですよ。そういう場合、例えば特区を申請するとか、それくらいの覚悟で臨まなくてはならないと。産業としてはこの地域で有効だということを先ほど佐々木同窓会長からお話があったように、醸造は世界的にも注目されているものであります。そういうものを高校生の頃からきちんと理解して産業に携われる人材を育てていくということは、この地区の高校としての責務でもあると思います。ですから、やるとなればそのくらいの覚悟で臨んでいただきたい。法律にひっかかるから駄目だとか、これまでどおり同じような終わらせ方をしてほしいと思っております。せっかくこうやって出てきている話ですから。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

確かに醸造イコールお酒という風にとれば、未成年に対してうんぬんという話は出てくるかと思いますが、幅広く考えれば、資料にもありました味噌ですとか、醤油というものも醸造の一つであるわけで、どこのポイントから広げて、関連を持たせていくかということについては、奥山委員の提案にも関わるところだと思いますし、仮にそれを実施する時に既存の枠の中でできないということであれば、何か新たな展開をする上で必要な対応、特区という例もありましたけれども、検討していかなくてはならない視点だと思います。それが実現可能かどうかということも当然見ていく必要もあるわけで、何が何でもということにはならないかもしれませんが、検討の中ではそういった幅を広げていくことについては大事な視点であると思いますので、柔軟な検討が進められるとよいのではと思っております。

【松山高等学校教育後援会 奥山会長】

一つヒントとして話しておきたいと思いますが、大崎には発酵文化の研究会というものがあるのですよ。発酵を研究するということとなれば、どこの学校でもやっていないような教育内容になるだろうと、そしていろいろな食品に関連してくると思います。醸造のハードルが高いというのであれば、醸造も発酵と関連しておりますので、そういう道もあるということをお話ししておきます。

【高橋教育次長】

今の発言はお話ということでもよろしいでしょうか。では、佐々木委員どうぞ。

【南郷高等学校同窓会 佐々木会長】

私がお話した醸造科の話を取り上げてくださりましてありがとうございました。確かに私が松山高校の教頭時代に町の人たちの意見で松山高校の家政科一つ、場合によっては普通科を醸造科に変えてはどうかということで私が県教委に行きました。その時に県教委からは施設整備の問題、卒業生の進路先の問題、全国にあまり数のない醸造科についてはと、はねつけられました。20年間ずっとその思いでおりました。新たな学校を作るのであればこれを提案する時期だと思ひ、提案したところであります。

それから先ほど出していただいた資料ですけれども、この大崎地区に入ってくる、そして出て行く生徒について、入ってくる生徒がプラスになっていると。私は石巻の人権擁護委員協議会に所属しております、年に2回石巻地区の23の中学校を個別に訪問して歩いているわけですが、震災後、石巻地区では毎年中学生の数が100人くらい、場合によっては200人ほど減っています。これは大崎地区で、震災により、少子化により減っている子供の数と比較にならないほどであります。いずれ石巻地区から大崎地区に入ってくる子供たちの数がどのように変わっていくのかという心配もあります。今、石巻では高等学校は学級減でやっとなら対応している。極端な話、石巻市立の桜坂高校1校分が無くなっても不思議ではないくらい減り方をしております。いずれその影響はこの大崎地区にも現れてくると考えた時に、涌谷高校に福祉科を設けるならば、涌谷高校を入れて、もうこの地区には小牛田農林高校と新たな学校の2校として、あと10年後にまた見直すのではなくて、10年先を見越した学校でもよいのではないかと。南郷高校と松山高校の普通科を無くすのであれば、まして涌谷高校に福祉科を設けるのであれば、涌谷高校を合わせても、前に申しあげました南郷高校のあの校地に8学級規模の学校が出来ても不思議ではないと考えております。他地区から入ってくる子供たちをカウントすることの危険性を私は危惧しております。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

難しい御提言だったと思います。今のところこの資料でお示しした以外の組合せということについての材料を持ち合わせていなかったもので、この場でお答えすることは難しいため、今日は御意見として聴かせていただきたいと思います。

【高橋教育次長】

我々は石巻地区の状況についても当然見ておりましたが、大変厳しい状況にあるということは委員のおっしゃるとおりです。そういった中で涌谷高校の役割というものも、大崎地区においての役割だけでなく、石巻も含めた涌谷という位置付けも当然あります。今後の

数字についても見ていかななくてはいけないのですが、委員のおっしゃる点、とくに後半のところは、課題としてはもちろん十分認識をしていますが、今の段階では室長の話したとおりでございます。他に委員の方からいかがでしょうか。

【小牛田農林高等学校 樽野校長】

一つ確認をさせていただきたいのですが、資料1の1ページに戻るのですが、もしかすると今お手元にデータがないかもしれませんが、気になったのでお伺いします。先ほどの事務局からの説明で、検討を踏まえて用地取得とかで7年くらいかかるというようなお話もあったかと思います。1ページ目の大崎地区の中学校卒業生数の推移のグラフですが、平成30年からずっと見ていくと、平成40年に少し上がりますよね。これ以降はまた下がるのでしょうか。なぜこのようなことを聞くのかというと、再編統合に7年かかると、今このグラフを見ると現在平成30年度ですから、平成36、7年あたりに新しい学校ができるとした時に、せっかく再編統合したのに、今度は増えてくるといことがもしあるのならば、統合の在り方というものもまた見直さなくてはいけないかと。私が何を言いたいのかというと、平成40年より先はどうなのかということと、7年くらいかかるということなのですけれども、時代の流れが非常に速くて、いろいろな新しい科の話も出ているところですが、7年後くらいの時代のニーズに合うものが何かということ、私にも分かりませんが、そういうところも見据える必要があるならば、7年という時間を短縮して早くやった方がよいと思います。もしデータがあれば確認させていただきたいと思い、質問させていただきました。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

まず、データについてですが、具体的な数値としては、今持ち合わせておりません。と言いますのも、この中学校卒業生数の推移というものはどうしても推計値で、たとえば10年後の数を見る時には今の5歳とか4歳、3歳の数字を拾っていくくらいでしか実数としては拾えないので、なかなか推計が難しい、ただ住民基本台帳上のトレンドを見ていけばやはり減っていく方向にあることは間違いなさだろうということで、今後の将来像を検討する上では、踏まえるべき一つの視点だと思っております。

【高橋教育次長】

また、後段のお話で、7年というのは本当に長いと我々も思っております。今のところ新設した場合ということになります、改修等であればもっと早い時期になりますが、新設ということ意識して考えた時に、我々も長いと思っておりますし、実は秋保に今度、特別支援学校を作りますけれども、それもその位かかってしまうということで、議会からも大分御意見をいただいていたのですが、今の復興の事業等、県の担当部局でやっている事務量からして、大規模な事業をする場合のチェックなど県で行う様々なチェックも入って

きますし、実際の設計段階でもかなりかかってしまうという状況です。我々もなるべく早くしたいという思いは当然あるのですね。そのようにしたいのですが、我々自身が、教育庁がそういう事業を直接やっている訳ではないので、その辺の辛い思いは同じであるというところで、そういうところは我々としても要望していきたいと思っております。他にいかがでしょうか。鈴木委員どうぞ。

【大崎市内小中学校長会 鈴木副会長】

資料4の左下の「社会の変化や生徒の実態に対応した新たな学びの創出」という言葉なのですけれども、ここからどのような具体的な姿をイメージしたらよいのかをお伺いさせていただきたいと思いました。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

こちらは学科として設けるということ以外にもいろいろなやり方ができるのではないかと考えております。いわゆる系列として分けるというやり方もあれば、先ほどいくつか話にもありましたけれども、例えば地域との関わりの中で地域課題を学びのフィールドとして考えることなどいろいろあると思いますので、必ずしも学科そのものに対して言うのではなくて、学びの展開の中で考えられる要素と思いますし、それに関してもこれから検討を深めるべきことだと思います。

【大崎市内小中学校長会 鈴木副会長】

生徒の実態という言葉、中学校を卒業して行って、現に松山高校、鹿島台商業高校に丁寧で育てていただいている子供たちがいるわけですが、前は学び直しという言葉もあったわけですが、それは別の資料を見ると田尻さくら高校と位置付けがあるわけですが、学び直しが必要な生徒が、すべて田尻さくら高校に入るというわけではないと思いますし、また現状で特別に支援が必要な子供たち、具体的には学力が高くても、集団生活が苦手な子供たちがすべて田尻さくら高校に行くわけではないと思います。新設校の柱に具体的に表現することは難しいと思いますが、「生徒の実態に対応した新たな学びの創出」というところに、子供たちがその説明を読んだ時に「ああ、私も行けるかも。」というように思えることが具体的に述べてあり、そして実際にプランもしっかり立てて、多くの子供たちが自分もこの学校でがんばろう、という気持ちで入学できるようにしていただけたらと思っています。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

今お話がありました部分で言いますと、例えば特別な支援を必要とする、いわゆる個別に支援しなければならぬ生徒が仮にいた場合には、新たにできる通級指導というものも含めて対応していく必要があるかと思っております。そういう意味では学校の中でそういう生

徒に対応できる、そういう経営感覚を持った学校にしなければならないと考えているところ
です。

【高橋教育次長】

校長先生がおっしゃった思いに対する答えは、今、室長が申し上げたとおりだと思います。他に委員の方から。徳能委員。

【松山高等学校 徳能校長】

私もいろいろな思いというか、こういう学校であつたらよいとか、こういう仕組みがあつたらとか考えていることはたくさんあるのですけれども、この場で言うべきことではないかと思しますので、これからのスケジュールについてです。これからどのように集約していくかということですね、それからもう一つ、この枠組みはどうやっても、先に私が言ったもっと分かりやすい枠組みを、せつかく再編するのならばした方がよいとか、クラス数の問題、せつかく再編するなら小さい学校をまた作ってまた定員が割れました、また3クラスになりました、じゃあやはり無くしましょう、というような議論を何となく人口の推計とか生徒数の推移を見ていくと、そここのところがとても懸念される場所なので、やはり一つの学校が無くなるということはとても大きなことですし、地域と繋がりを持っていろいろなことをやっていくためには、多くの時間をかけて地域との信頼を築きながら、やってきたわけですけれども、そういうことを、せつかく時間をかけてやってもまたゼロになってしまうというような、そういうことが繰り返されたのでは、本当に残念でならないですね。ということで整理すると、この枠組み、3校を再編統合、それから1校、1校ということ、これは動かし難いことなのかということ、これからのスケジュール、具体的には各学校のいろいろな思いをですね、南郷高校、鹿島台商業高校、本校の思いを受け止めていただく機会を今後どのように作っていただけるのか、いただけないのかについてお尋ねしたいと思います。

【事務局（佐々木教育企画室長）】

まず枠組みに関して申し上げますと、検討に時間を要するあまり何も動けないということは本末転倒というかとても苦しいことだと考えております。そういう意味で申し上げますと枠組みに関しては、まずこれをベースに検討を進めさせていただきたいと考えているところ
です。

もう一つは検討していく過程における様々な思いについてということですが、例えばこのような形で集まっていたらいいということとはなかなか難しいと思いますが、その時々
にいろいろ聴かせていただく機会というものも当然あると思います。それは時々に応じて
対応させていただきたいと思います。

【高橋教育次長】

具体的に制度設計するに当たりましては教育企画室が主務担当課室ですが、当然指導教員を含めれば高校教育課なり教職員課とよくよく話し合っ、新しい学校を作る時には、「はい、これで」という形にはならないですし、それから徳能委員がおっしゃるように、各学校の思いを当然お聴きしながら新しい学校を作っていくということで、皆で知恵を出し合わないとなかなか難しいと思います。この枠組みをベースとして議論を進めさせていただいて、当然その中に、今までいただいた議論も踏まえながら、学校側の思いもお聴きしてですね、良いものを作っていくというスタンスで進めさせていただきたいということです。それからスケジュールについては後ほどお話ししたいと思います。

今日御説明した将来像について、御意見等ございますでしょうか。これまでに3回、皆様から御意見をいただき基本的なスタンスを決めながら、今日、具体的な枠組みをお示しさせていただきました。もちろんいろいろな御意見があるということは提案した我々も承知しております。全員が素晴らしいという計画がお示しできればと思いますが、様々な御意見を今日もいただきました。この大崎の特性とか地域の持っている特徴とか、そういうものを新しい学校に、どうやって反映させていくかも、我々が考えていく上での大きな視点になっていくと思います。もちろん今日の御意見を踏まえまして、この会議といたしましては次回で大体の整理をさせていただきたいと思いますが、今日の御意見等も持ち帰りしっかりと議論した上で最終的な考え方、もちろん先ほどお話しとおおり、今後は意見を聴かないということではなくて、それぞれの学校に、地域の意見を聴かせていただきながら制度設計に着手していきたいと考えております。それでは、閉じさせていただきたいと思いますがいかがでしょうか。それでは、進行を事務局にお返しします。

5 その他

【司会】

ありがとうございました。次第「5 その他」ですが、何かございますでしょうか。それでは、事務局から次回の会議について御連絡させていただきます。次回の会議につきましては、恐れ入りますが3月22日（金）の午後3時からの開催とさせていただきます。年度末の大変御多忙な時期ではございますが、出席について予め調整をよろしく願いいたします。なお、会場は本日と同じ本会場での開催を予定しております。

6 閉会

【司会】

以上をもちまして「第4回大崎地区における高校の在り方検討会議」を閉会いたします。どうもありがとうございました。